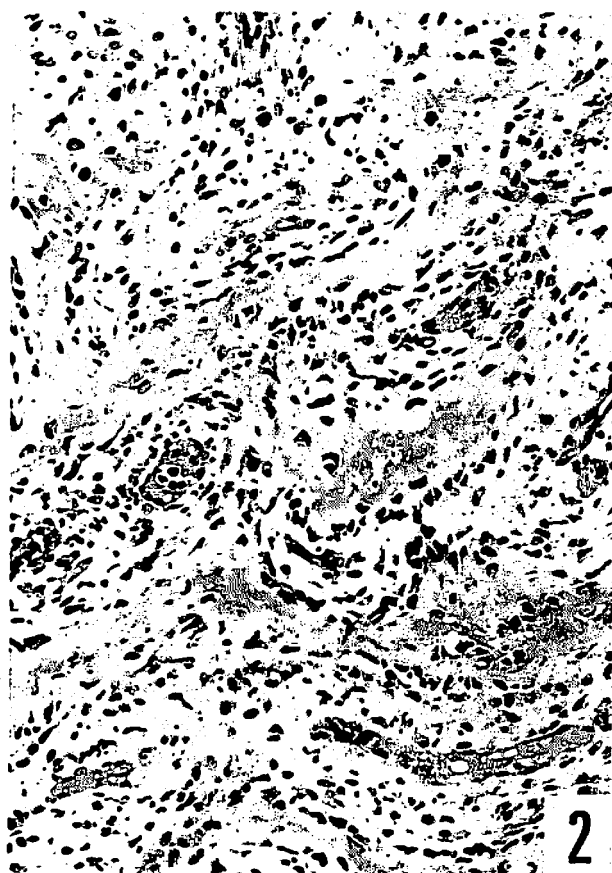
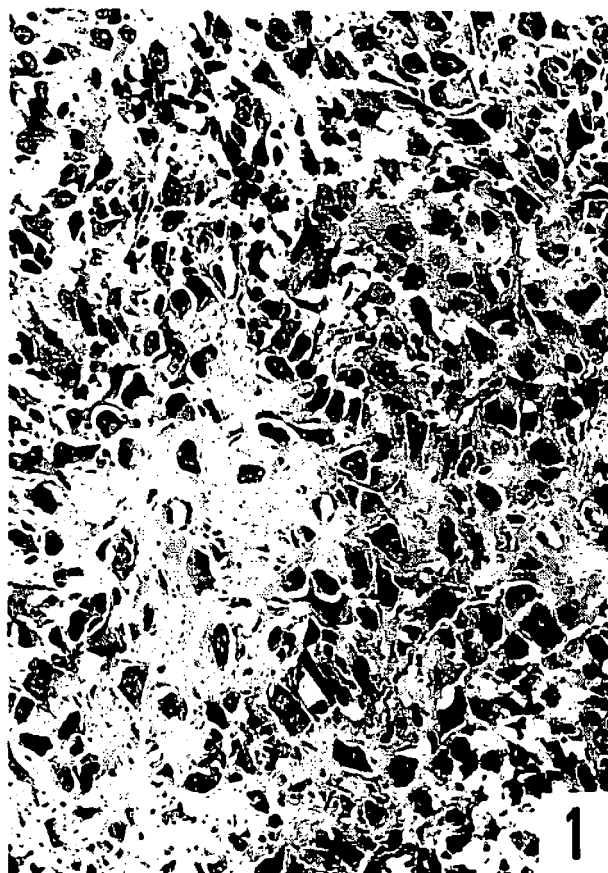


# 熊の歯周囲組織腫瘍

家畜衛生試験場北海道支場，胆振，石狩家畜保健衛生所出題  
第27回獣医病理学研修会標本No.476



動物：ヒグマ，雄，11ヵ月齢。

臨床的事項：生後9ヵ月頃から右上顎第2-4白歯周囲の歯肉組織にピンピン球大の隆起を認め，外科的に摘出。1ヵ月後にその周囲に同様の腫瘍が再発した。血液検査所見ではCa:9.2, Mg:2.0, 無機りん:4.4, ALP:20, GOT:28, GPT:21で，いずれも正常範囲であった。

肉眼所見：乳歯ごと摘出された腫瘍の表面は灰白色で，断面は褐色を帯び，不規則な走行を示す樹状灰色組織で区分される部分も認められた。腫瘍を鋸で切断する際，かなり硬かった。

組織所見：腫瘍は上部に歯を有し，種々の成熟度を示す骨梁が比較的整った連続性をもって配列し，骨梁は極めて多数の骨芽細胞により縁取られていた（写真1，×400，写真2，×200，H E染色）。骨梁間結合組織は骨芽細胞様細胞と線維芽細胞及び膠原繊維からなっていた。破骨巨細胞が多数配列し，盛んに骨梁を食食する領域が帯状に見られ，これら細胞周囲は囊胞腔を形成していた。歯根膜は薄く，萎縮性で，シャーピー線維の走行は不明

瞭であった。

病理組織学的診断：以上の所見から本例は良性骨芽細胞腫と診断された。本例は「顎骨のfibro-osseous lesion」に含まれる病変で，類症鑑別が問題となり，実際，研修会参加者から多くの異なった診断名が提案された。線維性骨異形成は骨梁を骨芽細胞が取り囲まない。骨形成性線維腫は骨芽細胞が少なく，線維組織が多く，硬組織が球状ないし，塊状線維骨である。また，上皮小体機能亢進，汎発性線維性骨炎は病変分布とALPase, P, Ca, の動きから鑑別されうる。現在まで再発は見られないが，腫瘍境界が不明瞭な点や，核分裂像が認められる点等，本例は骨肉腫を疑わせる所見も持つため予後の観察が必要である。

顎骨のfibro-osseous lesionでは歯由来の腫瘍も類似した病変を呈するので，診断にあたって，臨床，病理，レントゲン，血液（ALPase, 無機りん, Ca）の所見を総合的に見る必要がある。